

基礎・基本の定着をめざした国語科の指導の工夫

量的側面・質的側面・学習環境の側面からのアプローチを通して
平成20年度の重点:「表現力の向上を目指した『書くこと』について学習指導の工夫」

主題設定の理由

1 学校教育目標の具現化から

本校では、「心身ともに健康で人間性豊かな児童の育成」を教育目標に掲げ、めざす児童像の1つとして「進んで学習する子」を設定している。これは本年度の重点努力事項である「基礎・基本の定着を図る学習指導の推進と充実」により、「基礎・基本の定着と内発的・主体的な学習意欲の醸成」がなされたときに具現化されるものと考えている。「基礎・基本の定着」と「学習意欲の醸成」は密接な関係にあり、「できるから、分かるから、もっとやりたくなる」「やりたくなるような楽しい学習活動だから、できる、分かるようになった」というように、双方を螺旋状に絡み合わせ高めていきたいと考えている。

特に、国語科はすべての教科の基となるものとして、母語教育としての重要性が指摘されることである。そこで、国語科において、基礎的・基本的な内容と学び方の定着をめざした指導の工夫を通して、めざす児童である「進んで学習する子」の具現化を図りたいと考えた。

2 今日の課題から

平成20年3月に告示された新小学校学習指導要領の改訂の基本方針として「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランスの重視」が挙げられている。そこで「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力」が学習指導要領改訂によりますます重視されてくることとなる。その中の「表現力」においては、他者とのコミュニケーション手段として、あるいは自らの学習を深める手段としてより一層育成されていくことが必要となってくる。つまり会得した知識・技能を活用していく力の一つである表現力のさらなる育成が大切であると考えられる。

また、国語科における改訂の基本方針には「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」が挙げられている。すなわち、国語科の学習が「各教科等の学習の基本となる言語の教育としての立場から、実生活や実社会で必要な言語能力や、言語文化に親しむ態度などを確実に育成していかなければならないこと」を重視しているということがいえる。

新学習指導要領実施にむけて、国語科の基礎・基本とは何かを再考していくこと。また母語としての国語教育、技能教科としての国語教育の在り方を考え、それに即した実践研究を進めていくことで、一人ひとりの児童の基礎・基本の定着を図りたいと考え本主題を設定した。

3 児童の実態から

本校は全校児童38名の小規模校である。児童は明るく素直で、指示されたことや与えられた課題には真剣に取り組む。これまでの6年間の基礎・基本の定着のための取り組みにより、「やればできる」「もっと難しい問題にもチャレンジしたい」と自分を更に高めようとする意識が見られてきた。平成20年2月8日に実施した「漢字検定」(日本漢字能力検定協会)では、2年生から6年生の28名の児童が受験して27名が合格した。

平成20年5月に加美町のすべての学校で実施した標準学力調査(東京書籍)の結果では、「話すこと・聞くこと」や「言語事項」において全国平均(期待正答率)を上回っている学年もあり、徐々に児童が力をつけてきたとすることができる。

また、平成20年3月に実施した「国語に関する意識調査」の結果からは、本校児童の素直さを読み取ることができた。「国語ではどんな勉強が好きですか?」の設問に対して、選択数が多かったのは、「図書館の本を読むこと」、「物語で登場人物の気持ちや場面の様子について考えること」、「作文や日記などを書くこと」、「国語辞典でことばの意味を調べること」であった。これらは、プロジェクトや授業作りで力を入れてきたことである。このように打てば響く素直な児童が「国語が得意だ」と思うことができるよう、基礎・基本をしっかりと身に付けさせる責任を強く感じる。

また、作文について聞いたところ「好きな割には得意だという意識は低い」ということが明らかになった。

好きな理由としては「自分の考えを書いて伝えるのが嬉しい」「みんなに読んでもらえるのが嬉しい」「褒められたり賞をもらったりして嬉しい」というのが多くあり、苦手な理由としては「書き方が分からない」という技術面の問題、「書くことが見つからない」という着眼の問題、「長く書くのが疲れる、面倒」という意欲の問題を挙げている。

さらに、保護者からも「語彙が乏しく豊かな表現ができていない」「短作文の書き方がワンパターンである」「文字が乱雑になる」など、書くことに関する児童の課題について指摘する声も聞かれる。また、大人数の前や改まった場で話すことへの抵抗感や話し合いの経験の少なさを

ど、小規模校であるが故の課題も多い。

4 これまでの研究から

本校では平成17年度から3力年間「基礎・基本の定着をめざした国語科の指導の工夫」というテーマで国語科の学力向上の研究に取り組んできた。

初年度は、「言語活動の日常化」をめざして5つのプロジェクトを立ち上げ、児童にとって様々な形で国語に触れる機会を増やすための環境作りに取り組んだ。児童は毎日「漢字つみき」や日記、暗唱やスピーチに一生懸命取り組み、今ではそれらを頑張ることが当たり前のことになった。2年次からは、質的側面からアプローチとして、「読むこと」の領域に焦点を当て、よりよい授業づくりと指導力の向上に取り組んだ。「出会い読み ハテナ読み 一人読み 読み深め 読み返し 発展」という「単元指導の基本展開」を構築したことは、国語の指導に苦手意識をもっていた我々の自信と意欲を高めた。

3年次の研究から見えてきたことの一つに、読解と表現の接続を重視すべきではないかという考えが出された。

読解においては、「児童の力と意識をよりよい方向に導くことができた」という成果は得られたが、その一方で前述したように「書く」ということに関しては課題が浮き彫りになった。

読むことと書くことは密接な関わりを持つもので、「深く読み取るために書く」「書いたことにより読み方が変わる」など、読解の中で「書くこと」をどのように有効に生かしていくか。

また、授業づくりの面では「書くこと」の単元指導においては、書き方そのものを教える技術的な指導が不十分ではなかったかという反省も出された。

以上のような理由から研究4年目になる今年度は、研究の重点を「表現力の向上を目指した『書くこと』について学習指導の工夫」と定めて、基礎・基本の定着に取り組んでいきたい。

研究目標

児童に「基礎・基本」を確実に身に付けさせるための、量的側面・質的側面・学習環境の側面からのアプローチの仕方を明らかにする。

研究仮説

国語科の学習において、以下の様な手立てを講ずれば、児童一人一人が「話す・聞く」「読む」「書く」力を身に付け、基礎・基本の定着が図れるであろう。

- 1 「言語活動の日常化」の手立てを工夫することにより、児童が繰り返して言語活動に接する機会を保障し、言語技術の定着を図る。【量的側面からのアプローチ】
- 2 表現力の向上のための授業展開を工夫するとともに、発問や机間指導などの授業技術を吟味することにより、よりよい授業づくりをする。【質的側面からのアプローチ】
- 3 教育課程、週時程の在り方や家庭との連携方法を工夫することにより、児童の学習環境を整える。【学習環境の面からのアプローチ】

研究の具体的手立て

- 1 量的側面からのアプローチ 言語活動の日常化の工夫
各プロジェクトの取り組み
＜言語技術プロジェクト＞
 - ・「ことのはの時間」(毎週金曜、業前から1校時の60分間)における「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関するスキル指導の進め方の提案
 - ・「ことのは」のカリキュラムの見直し
＜読みプロジェクト＞
 - ・読みのスタイルの類型化(方法、ねらい、効果など)
 - ・本読み、朝読書、暗唱活動の企画運営
 - 朝読書での「読書リレー」の進め方の改善
＜漢字つみきプロジェクト＞
 - ・「漢字つみき」の進め方、評価の在り方についての提案
 - ・「漢検」(日本漢字能力検定協会)の取り入れ方についての提案
＜辞典活用プロジェクト＞
 - ・辞典の使い方の指導法の提案と辞典が日常的に利用できる環境の整備
- 2 質的側面からのアプローチ 表現力(書く力)の向上のための授業展開の工夫

作文単元の授業展開の工夫

・書こうとする意欲を喚起するために

目標を明確にする教材文の活用の工夫（モデル）
続き話，なりきり作文などの題材の工夫
読み手意識を持たせたり，話し合いでイメージ作りをしたりすること。
取材活動などを入れて意欲化を図ること。

・児童の発想を豊かにするために

「結論につなげる根拠だけを書く」「結論だけを書く」など部分的に書かせること
使えそうな文例を選択して当てはめること。
ブレンストーミング，ウェイピングによってイメージを広げること。
表現様式に応じた構成メモ工夫

・段落構成や表現技法を捉えさせるために

ねらいに合わせたモデル作文の工夫
教科書教材のモデル作文としての活用の工夫
時間的な順序，できごとの順序，事柄の順序など場面意識を持たせること
接続詞の使い方の指導による校正の指導

・推敲がしやすいような書かせ方をさせるために

推敲用の原稿用紙の活用
色を活用した推敲

・充実感や達成感を高めるために

モデル作文をもとにした評価。
充実感や達成感を高めるための評価の工夫（個，ペア，グループ）
児童への評価言の充実を図ること

読解単元における書く活動の工夫

- ・「読み深め」の段階において，学習課題についての考えの深まりを書く活動を取り入れる。
 - ・「読み返し」の段階において，感想や評論を書く活動を取り入れる。
 - ・「発展」の段階において，教材文の構成や表現に倣って書く活動を取り入れる。
- 各学年の書くことについての基礎・基本の明確化
- ・カリキュラムの整理と「ことのはの時間」との関連付けを図る。
- 授業技術向上を目指した研修の工夫
- ・模擬授業形式による事前検討，「授業研究カード」を使った事後検討会の実施
 - ・有効な指導技術の累積と明文化
 - ・授業づくり研修会の実施

3 学習環境の面からのアプローチ 児童の意欲を高める環境作りの工夫

学習の場の設定と意欲付けの工夫

- ・基礎・基本の定着のための週時程の工夫と「ことのはの時間」の設定
- ・発表の場の設定を意識した集会活動や諸行事の見直し
- ・他教科，総合的な学習の時間との関連付けた発表や発信の場の設定
- ・地域と連携したイベントの企画運営（例：保育所での「出張お話し会」など）

家庭との連携の強化

< 学家連携プロジェクト >

- ・国語力向上の取り組みについての啓発，PTA国語学習研修会の実施
- ・「学習記録カード」の活用による家庭での見取りの強化
- ・小中連携，保小連携など縦の連携作りの企画運営

4 その他のアプローチとして 児童の実態把握と評価の工夫

基礎・基本の明確化と個の実態に即した支援の在り方の工夫

- ・単元毎の評価規準を明らかにし，その達成のための方策を個のレベルで考える。
- ・諸検査の結果や学習履歴を累積する。
自己の向上を自覚させる評価の工夫
- ・初めと終わりの自分の考えを比較することにより，考えの深まりや広がり気付かせる。
- ・デジタル機器を活用して音声言語表現の評価を工夫する。

主題等のとらえ方

1 基礎・基本とは

国語科の学習指導要領に示された目標，内容の全てである。

国語科では，「適切に表現する能力」と「正確に理解する能力」の育成を基盤としながら，「伝

え合う力」を高めることを目標としていることから、これを基礎・基本と捉えることができる。「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して適切に表現したり、正確に理解したりして、よりよい人間関係を築いていく力」であると考えられる。この力は、これからの情報化・国際化社会で生きてはたらく大切な力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容である。その育成のためには「何を、だれに、何のために、どんな条件で、どんな方法を使って伝えるのか」を意識して「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」についての言語活動を行うことが必要と考えた。また、教育課程審議会の答申が、「日常生活に必要な話す・聞く、書く、読むなどの基礎的な内容を繰り返し学習し確実に言語能力を育成することを重視」していることから、国語科の授業だけでなく、他の教科・領域等においても言語活動が繰り返し行われるように意図的に指導をしていくことが必要と考えられる。

2 3つの側面からのアプローチとは

本校では、基礎・基本の定着には3つの側面があり、それぞれの面からのアプローチが必要と考えている。

(1) 量的側面からのアプローチ

「できないことをできるようにする最も簡単な方法は、たくさん練習することである」ことは誰もが認めるところである。国語科に於いては、「話す・聞く、書く、読む」活動が毎日のように繰り返し行われる仕組みを作ることが重要と考えた。これが量的側面からのアプローチである。本校では、これを「言語活動の日常化」と呼んでおり、それを担うのが「読みプロジェクト」「言語技術プロジェクト」「漢字つみきプロジェクト」「辞典活用プロジェクト」の4つのプロジェクトである。

(2) 質的側面からのアプローチ

やみくもに練習するだけでは効率的とは言えない。よりよい授業作りをすることによって考え方や学び方を身に付けさせる質的側面からのアプローチは、やはり研究実践の本質である。本年度は「書くこと」に重点を置き、児童一人ひとりが自分の考えや思いを相手に伝えることができるようにするための方法として、本校では「作文単元の授業展開」「読解単元における書く活動」を児童の実態に合わせて工夫していく。また、それを支える片々の授業技術を向上させることも、学びの質の向上のためには、きわめて重要な要素である。

(3) 学習環境の面からのアプローチ

教育課程、週時程、家庭の学習環境などを整えることを指す。特に本校では、基礎・基本の定着のためには家庭と学校の協力が不可欠と考え、「学業連携プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは、家庭学習の支援の仕方、音読や漢字つみきの進め方などについて体験しながら学ぶ「PTA国語学習研修会」を企画運営している。学習面での学業連携は、本校の1つの特長になりつつある。

3 表現力の向上を目指した「書くこと」とは

2006年のPISA調査から、次のような課題があることが分かった。

読解プロセスにおいてテキストの「解釈」「熟考・評価」に、出題形式において「自由記述（論述）」に課題がある。

実は我が国の子どもたちは「読解力」の低下と共に「自分の意見や考えを文章で述べることを苦手としている」、つまり「書くことを苦手としている」ということが明らかになった。この傾向は、本校児童にもそのままあてはまるものである。したがって本校では、表現力を向上を目指した「書くこと」を「何を書くのか」「どう書いたらよいか」等の書く力〔技術力〕を高めることと捉え、日々の学習の中で積極的に書くための技術を身につけさせていけるよう指導していく。そこで、本校では「書く力」を4つの段階に分けて以下のように整理した。

第一段階「何を書いたらいいのか」(発想の力)
第二段階「文章をどう組み立てればよいか」(構想の力)
第三段階「文章をどう書いたらよいか、書くためのきまり」(記述、表記の力)
第四段階「よりよく伝えるためにどう書いたらよいか」(校正、推敲、評価の力)

授業作りでは、それぞれの段階の書くことができるを実現させるために、どんな手立てを講じるかを明らかにすることが重要である。

4 言語活動とは

言語活動とは、国語の指導内容と子どもたちの学習活動との関連を図り、国語科授業の効果を上げる学習活動である。現行の指導要領の内容の取り扱いにおいて「(1)内容の『A話すこと・聞くこと』、『B書くこと』及び『C読むこと』に示す事項の指導は、例えば次のような言語活動を通して指導するものとする。」と具体例が明示されていることから、「話すこと・聞くこ

との能力」「書くこと的能力」「読むこと的能力」を育成するための主たる方法と捉え、指導にあたるのが肝要である。

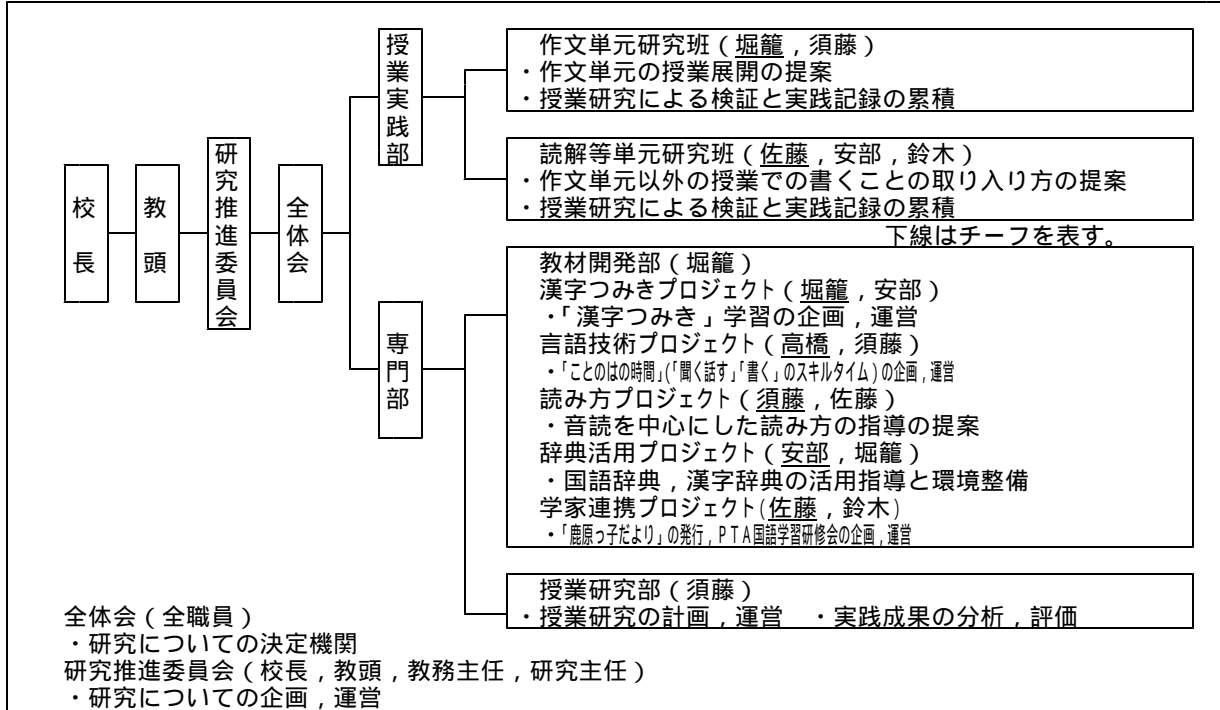
さて、本校における「言語活動の工夫」とは、児童が、相手意識、目的意識、表現や理解についての方法意識などを具体的にもてるようにするために、学校や児童の実態に応じて活動の内容や方法などを工夫することである。例えば、教材文の構成や表現に倣って文章を書くなどの技能定着を主目的にした活動や、学校や地域の行事や総合的な学習の時間等との関わりを考慮して、発表や取材活動を位置付けることなどが想定される。

また、「言語活動の日常化」とは、言語活動を授業だけでなく、業前活動や帰りの会、家庭学習の中に位置付け、繰り返して学習できるようにするものである。これは、目標・内容を2学年のまとまりとした「国語科の指導内容が、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しの学習を基本としている」という考えに基づいている。尚、漢字の読み書きや国語辞典の活用など語彙を広げる活動など言語に関する指導事項についても繰り返しの学習が重要であることから、言語活動の一部と位置付け、その日常化に力を入れていく。

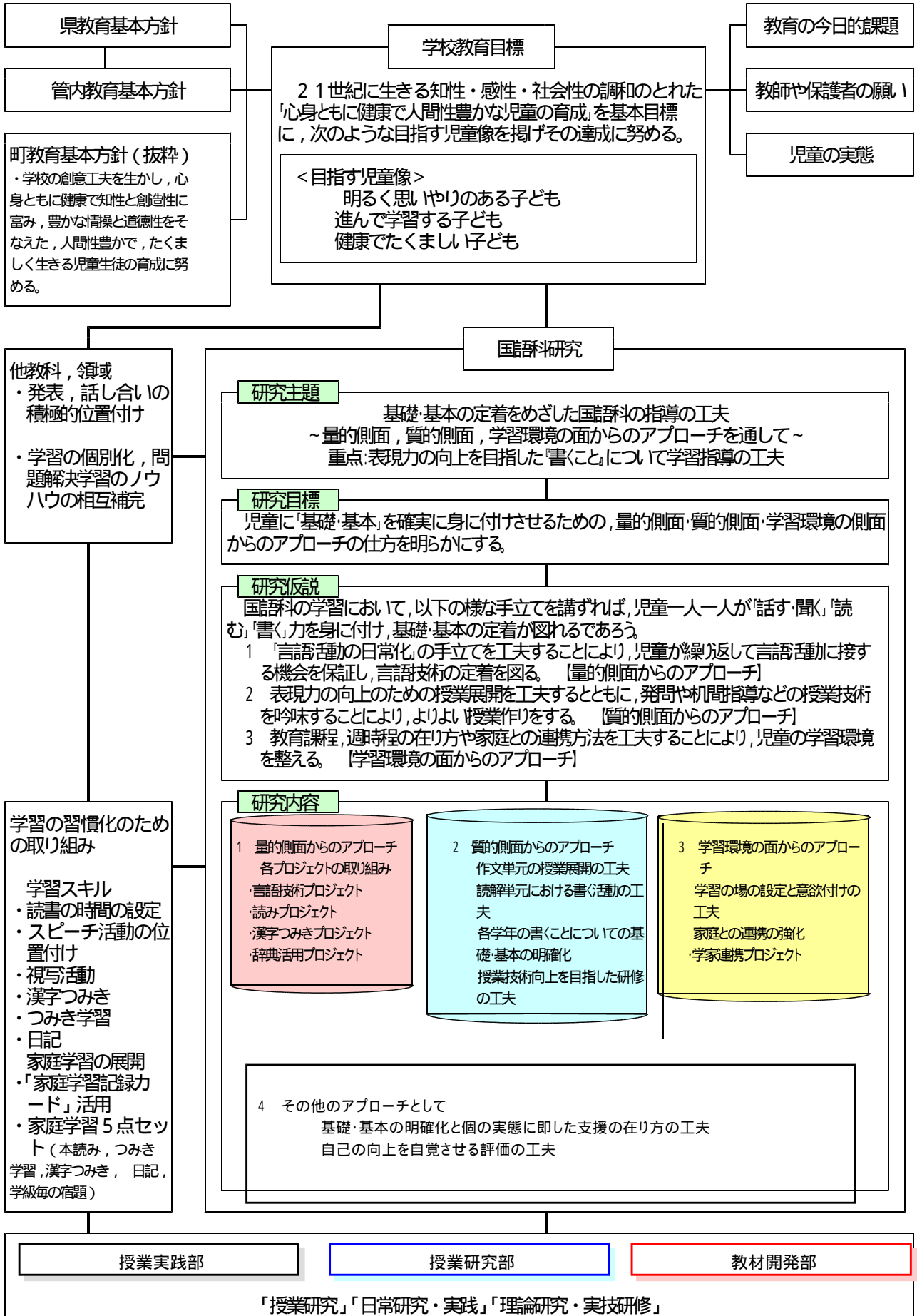
研究の計画

月	・校内研究全体会の内容、実践内容	現職研修の内容、その他
4	主題、目標、仮説等の確認 授業づくり研修会のイメージ作り 各プロジェクトの進め方の検討	コンピュータ活用研修（ホームページの作成について）
5	全校学力テスト（国語、算数）の実施 「書くこと」の授業展開の検討 授業（2年生）事前、事後検討会	
6	授業（3、4年生）事前、事後検討会 日本語検定（5、6年生） PTA国語学習研修会 準備	
7	授業（5、6年生）事前、事後検討会 PTA国語学習研修会	PTA研修会（家庭での日記指導について）
8	授業づくり研修会指導案検討 8/22 授業づくり研修会 （2学期作文単元授業の指導案検討） 成田雅樹先生の模擬授業、実践協力者との授業作りワークショップ	各種研修の伝講会 「てのひら文庫」読書感想文応募
9	授業づくり研修会の成果と課題 学年部複式指導案の検討 研究授業の成果と課題の作成 授業（くぬぎ）事前、事後検討会	「朗読のすすめ」（劇団民芸の鈴木智氏を迎えて）
10	研究紀要等読み合わせ ・指導主事訪問（10/7：B訪問 全員国語の授業） 指導主事訪問の集約	作文指導研修（講師：吉田よし子先生）
11	「書くこと」の授業展開の修正 授業（1年生）事前、事後検討会	
12	PTA国語学習研修会 準備 PTA国語学習研修会 1年生の「漢字つみき」スタート	書きぞめ実技研修 PTA研修会（作文の模擬授業）
1	実践記録、各部のまとめ作成について	
2	「漢字検定」の実施 研究のまとめについて 研究集録作成作業	
3	次年度計画について	

研究の組織



研究の全体構想図



研究の概要

～平成20年度の重点:「表現力の向上を目指した『書くこと』について学習指導の工夫」について～

本年度は表現力の向上を目指した『書くこと』について、特に「作文単元の授業展開の工夫」について以下のような手だてを講じて授業実践を行っている。また、8月に実施した「授業づくり研修会」においても、各学年2学期に実施する作文単元の授業の提案を同様の手だてをもって行った。

- 1 書こうとする意欲を喚起するために
 - (1) 目標を明確にする教材文の活用の工夫(モデル)
 - (2) 続き話、なりきり作文などの題材の工夫
 - (3) 読み手意識を持たせたり、話し合いでイメージ作りをしたりすること。
 - (4) 取材活動などを入れて意欲化を図ること。

- 2 児童の発想を豊かにするために
 - (1) 「結論につなげる根拠だけを書く」「結論だけを書く」など部分的に書かせること
 - (2) 使えそうな文例を選択して当てはめること。
 - (3) プレーンストーミング、ウェイピングによってイメージを広げること。
 - (4) 表現様式に応じた構成メモの工夫

- 3 段落構成や表現技法を捉えさせるために
 - (1) ねらいに合わせたモデル作文の工夫
 - (2) 教科書教材のモデル作文としての活用の工夫
 - (3) 時間的な順序、できごとの順序、事柄の順序など場面意識を持たせること
 - (4) 接続詞の使い方の指導による校正の指導

- 4 推敲がしやすいような書かせ方をさせるために
 - (1) 推敲用の原稿用紙の活用
 - (2) 色を活用した推敲

- 5 充実感や達成感を高めるために
 - (1) モデル作文をもとにした評価。
 - (2) 充実感や達成感を高めるための評価の工夫(個、ペア、グループ)
 - (3) 児童への評価言の充実を図ること